一歩一歩

「不幸で終わりでは もったいない」

No.32

先日、昔から付き合いのある先生で、ボランティア等の活動に精力的に取り組まれている、大分県の江田泉先生（金光教大鶴教会）が、教会に来て下さいました。

懐かしさもあり、思い出話に花を咲かせていると、『軽トラック物語』があると話をして下さいました。

○

以前、道路の路肩に車を停めて作業をしている時、近くで『ドン』と大きな音がした。ビックリして見に行くと、停めていた軽トラックに乗用車が追突していた。居眠り運転ということだった。私の軽トラックは廃車になり、古い車なので保険会社から二十万円だけ渡された。当時は二十万円も出た有り難いという思いと、知人からお役に立つならと、譲ってもらった経緯や、これから生活が不便になることを思いながら、なにかひっかかるものを感じた。

このまま、不幸で終わったんでは、信心していて、もったいないという気になり、どうにか、この出来事がおかげにならないものかと…家に帰ってから妻と考えるようになった。

夫婦で話をする中、

「車を停めていたのは川のすぐそばだった。もし、私がその車をそこに置いていなかったら、事故をした車はそこで止まることなく、そのまま川に転落し若者の命は無かったかもしれない。そう考えると、この軽トラックは最後の最後に若者の命を救ったのだ」と、…

ある時、近所の方に「不幸でしたね」と、言われて、

「違うんですよ。実はその軽トラックは若者の命を救ったんです」と、話すようになった。

それから、しばらくして、別の方から普段使っていない軽トラックがあるから、貸してくれるという話になり、それは有り難いと、五ヶ月程、使わせてもらった。そのあと、持ち主の方が引き取りに来られた。

その方は、「主人を引き取りに来ました」と言われ、その言葉が理解出来ずに話を聞いてみると、ご主人の形見の軽トラックだったと…。その時、何も知らずに使っていた申し訳なさを思った。

その方は「いろんな御用に使って下さって、主人も喜

んでいます」と、大変喜んでくださった。

次の日、知人が仕事で使っていた、パワーゲート付きの軽トラックを一万円で譲ってくれるという話になった。若者の命を救ったあの軽トラックは、パワーゲート付きで帰ってきたのである。

○

江田先生は、九州北部豪雨（７年前）で、御自身の教会が床上浸水２メートルの水害に遭われました。

当時先生は、教祖様の**「自分のことは次にして、人の助かることを先にお願いせよ。そうすると、自分のことは神がよいようにしてくださる」**との御教えを大切に、御自身のことよりも他の困っている方を先にと、懸命に取り組まれました。

「振り返ってみると、自分の事は神様が本当に良いようにしてくださったな…」と、嬉しそうに語られるお姿に感銘をうけ、また、

「このまま、不幸のまま終わったんではもったいない」

との言葉がとても印象的で、刺激を受けました。

私も御用の上におかげを蒙りたいと思いました。